

## カント批判哲学の解明（その1）

### Die Erklärung der Kantischen kritischen Philosophie, 1 Teil

森 哲彦

von Tetsuhiko Mori

「哲学は、まさしく〔哲学者が〕自らの限界  
を知るところに成り立つ」（A727, B755）。

**要旨** カントによれば、彼以前の「批判哲学は、理論や実践の見地で、理性の満足に向かう傾向を」（VIII371）<sup>1)</sup> 持っている、とする。しかしカントの批判哲学は「認識に関しての理性能力一般の批判」（AX II）であり「経験を超えては何ごとかを独断的に決することは不可能である」（B424）とする。哲学とは、理性と目的との「連関についての学」（A839, B867）であり、また学ぶことができるのは、歴史的研究である、としているので、本論文では「哲学的自己省察」<sup>2)</sup>を試みるため、カント批判哲学を歴史的に研究する。

本論の意図はその際、カント批判哲学の或る概念を問題史的に解釈し、さらにカント批判哲学の体系を照らし出す精神史的解釈<sup>3)</sup>を試みることである。本論では「我々が知りえない事柄について」<sup>4)</sup> 自己の視点で読み解き、関心を持つ問題、ここでは神問題、神の存在証明を問題史的に、そしてそれを包括する精神史的解釈を試みる。

カント批判哲学の構想は「自然の形而上学と道徳の形而上学」（X145）であるので、それを前提として、Iで問題史的解釈、IIからVIまでで精神史的解釈を行う。そしてVIIでカントの二つの形而上学の構想を継承する、と考えられるヤスパース（K. Jaspers）哲学の「理論」と「実存」の構想を解明する。なお批判期でのカント哲学の全体像を概観するため、VIIIでカント批判哲学の人間学を論究するものである。

**キーワード：**神の存在証明（Beweis des Daseins Gottes）、問題史的解釈（problematische geschichtliche Interpretation）、精神史的解釈（geistliche geschichtliche Interpretation）、自然の形而上学（Metaphysik der Natur）、道徳の形而上学（Metaphysik der Sitten）、理論哲学（theoretische Philosophie）、実践哲学（praktische Philosophie）

## 目次

- I カント批判哲学の神の存在証明
- II 前批判期の自然科学期・独断的、合理的形而上学期
- III 前批判期の経験的、懐疑的形而上学期
- IV 前批判期の批判的形而上学期（以上本号）
- V カント純粹理性批判の解明
- VI カント実践理性批判の解明
- VII カント批判哲学とヤスパース
- VIII カント批判哲学の人間学
- IX 結

## I カント批判哲学の神の存在証明

### 1 序

カントは『純粹理性批判』1781, 1787年<sup>5)</sup>において、神の存在論的、宇宙論的、物理神学的証明の不可能性を論証し「道徳的法則が根底に置かれ」る「理性神学」(A636, B664)つまり道徳神学を論究する。しかもこれら三つの神の存在証明は、前批判期でも論述されている。本節では、神概念を問題史的に解釈するため、前批判期と批判期の神概念の解明を課題とする。なお本節では、神問題をそれが含まれる前批判期の諸著作と批判期の『純粹理性批判』に含まれる道徳神学に限定する。

### 2 前批判期

#### 2-1 自然法則からの神の存在証明

カントは自然科学期の著作『天界自然史論』1755年<sup>6)</sup>で「ニュートン (I. Newton) の原理に従って」自然の必然的展開という説を取る。カントによれば「自然はカオスのうちにあっても規制的に、かつ秩序正しく行動するにほかならないのだから、まさにこの理由によって神は存在する」(I 228)とし、自然法則からの神の存在証明を、いわゆる「物理神学的 (physikotheologisch) 証明」(A591, B619)により行おうとする。次にカントは必然的自然観から「宇宙構造の組織における最も卓越した秩序づけとその諸関係の完全性に示される神の手の確かなることを知らざるをえない」(I 331)とし、従って「自然が完全に展開すればするほど自然の一般法則が秩序と調和につながればつながるほど、それだけ確実に自然は神を証明する」として、宇宙構造からの神の存在証明を、いわゆる「宇宙論的 (kosmologisch) 証明」(A591, B619)

として行おうとする。

## 2-2 可能性の原理としての神の存在証明

カントは矛盾律 (principium contradictionis) を形式的原理とする伝統的形而上学に対し、同一律 (principium identitatis) を実在的原理とする。この新しい形而上学的解釈から神問題を論究する著作が『新解明論文』1755年<sup>7)</sup>である。そこでは同一律は「真理の認識が常に根拠に基づく」(I 394) ので決定根拠律とされる。この決定根拠律のうち、カントは「認識根拠 (ratio cognoscendi)」(I 392) は「現存在の根拠を自らのうちに持つ」(I 394) というもので、デカルト (R. Descartes) 的な神のいわゆる「存在論的 (ontologisch) 証明」(A591, B619) は不可能とする。一方「存在根拠 (ratio essendi)」(I 392) は「現存在を決定」(I 394) し「そのものは存在する」(ibid.) というものである。つまり「可能性に先行して存在するもの、絶対必然的に存在するものがある。それは神と呼ばれる」(I 395) とする。このように「可能性の絶対必然的な原理としての唯一の神が存在する」(ibid.)。これがカントのいう可能性の原理としての神の存在証明である。

## 2-3 絶対的な現実的必然性としての神の存在証明

カントが「神の現存在のあらゆる証明根拠」(II 156) のうち「唯一可能な証明根拠」を論じた著作に『神の存在証明』1763年<sup>8)</sup>がある。カントは「現存在を前提としている限りでの内的可能性 (innere Möglichkeit)」(II 78) を分析し「なんらかの可能性が存在して、しかもなんらかの現実的なものが存在しないことは自己矛盾」(II 78) となるので「すべての可能性は、現実的なものの帰結という形で与えられる」(ibid.) とする。そこでカントは、内的可能性の唯一の根拠とされる「現実的なものを、この絶対的可能性の第一実在根拠」(ibid.) とする。それは「神に他ならない」(II 89)。この「絶対的可能性の第一実在根拠」(II 79) が神の現存在である。それゆえ神の現存在は「絶対的な現実的必然性」(II 82) としての神の存在論的証明となる。これがカントの新しい神の存在証明である。

## 2-4 自然的神学と道徳

自然的神学と道徳を論じた著作が『判明性研究』1764年<sup>9)</sup>である。それは「自然的神学と道徳の第一根拠」は「判明性論証が可能か」という懸賞論文の課題に答えるものである。カントによれば「自然的神学 (natürliche Theologie) の第一根拠は、最大の哲学的明証性 (evidentia) を持ちうる」(II 276) ので「神についての形而上学的認識はきわめて確実な」(II 279) ものとする。一方「道徳の第一根拠が... すべての明証性を持ちえない」(ibid.) のは、カントによれば「思弁哲学よりも実践哲学の欠陥」(II 300) である、とする。そして「道徳の第一根拠」は、そ

の後『純粹理性批判』において、道徳法則としてその明証性が達成されるものとなる。

### 3 批判期

#### 3-1 純粹理性の理想としての神の存在証明

カントは、純粹理性の「理想一般」では、理想は「或る種の行為の完全性の可能性の根底に存在している」（A569, B597）とする。しかし「超越論的（transzendental）理想」では、存在者が「実存在する一切のものにあって、必然的に見出される汎通の規定性（durchgängige Bestimmung）の根底に潜んでいる」（A576, B608）ものであり「そのような存在者の概念は、超越論的な意味において神の概念である」とする。従って思弁的理性による神の物理神学的、宇宙論的、存在論的証明は、不可能であるとし、カントは、道徳神学に基づく神の存在証明を行うものとなる。そしてカントは純粹理性の理想としての神を「経験的認識一般における多様なものに体系的統一を与える統制的（regulativ）原理」（A671, B699）による実践的認識として解明する道を確認するのである。

#### 3-2 道徳神学

カントによれば、理論的認識においては「神学に関する理性の単なる思弁的使用のすべての試みは不毛」であり「理性の自然的使用の原理はいかなる神学にも導びかない」（A636, B664）。つまり「道徳的法則が根底に置かれなかった」なら「理性の神学はありえない」（Aibid., Bibid.）。従って理性の思弁的原理に基づくすべての神学は「単に超越論的神学からのみ引き出されうる」（A642, B670）のである。道徳神学についてカントによれば、純粹理性は「道徳的使用においては経験の可能性の原理」を含むので「純粹理性の原理は、その実践的、道徳的使用においては客観的実在性を持つ」（A808, B836）とする。従って道徳神学では概念は、経験的可能性の限界内において「内在的（immanent）に使用される。すなわち我々が全目的の体系に適合することによって、この世界における我々の使命を果たすために使用される」（A819, B847）べし、ということである。以上、前批判期と批判期での神の存在証明の問題史的解釈については、さらにそれを包括する精神史的解釈が必要である。

## II 前批判期の自然科学期・独断的、合理的形而上学期

### 1 序

カント批判哲学は、合理論（Rationalismus）と経験論（Empirismus）の対立についての調停、結合から新たな形而上学を志向する。さて批判期哲学の成立『純粹理性批判』の前提は、カ

ント哲学の体系を照らし出す精神的解釈として著作『可能界と可想界』1770年<sup>10</sup>が挙げられる。しかし双方の著作には、相違する点が有るので後者は前批判期に含める。次にカント批判哲学成立の前史、つまり前批判期の区分を正確には機しきたいが、蓋然的に論述の便宜上、次の三区分とする。それは、1自然科学期・独断的、合理的形而上学期－1760年代半ば頃まで、2経験的、懐疑的形而上学期－1760年代中期、3批判的形而上学期－1770年代全般である。

## 2 自然科学期

### 2-1 『活力測定考』1747年<sup>11</sup>

本著作は、デカルト学派とライプニッツ (G. W. Leibniz) 学派による活力測定をめぐる論争に対し、一つの調停的役割を果そうとするものである。その活力論争とは「デカルトは運動体の力を速度の一乗によって測定しようとし、ライプニッツは力の測定として速度の二乗を認めようと」(I 33) していた。そして力の測定は幾何学の立場からはデカルト方式が、活力の運動からはライプニッツ方式が、妥当するとして対立を調停する。カントにとり重要なのはその「認識方法」(I 60) であり、ライプニッツの目的論的自然観とデカルトの機械論的自然観の哲学的主張の調停である。

### 2-2 『天界自然史論』1755年

本著作でカントは、宇宙の生成の体系を認め「神は存在する」(I 228) ものとする。つまり自然法則の立場から神の存在証明を行おうとする。そしてカントは宇宙の生成を「ニュートンの原理に従って」(I 215) 説明しようとする。しかしニュートンが宇宙の生成を「自然の一般化した法則と神の手」(I 339) によっているのに対し、カントは物質の自然法則の立場から「宇宙の体系的構造」(I 246) を説明しようとした。自然科学期の下ではカントは、自然科学と自然法則に基づく哲学的方法を展開するものとなる。

## 3 独断的、合理的形而上学期

### 3-1 『新解明論文』1755年

本著作では神の存在証明の方法を形而上学的に認識すること、つまり「認識の第一原理」(I 387) の新解明を行う。その際、第一命題では「第一原理は単純な命題」(I 388) なのであるが、矛盾律には肯定的と否定的があり、成立不可能となる。第二命題の「第一原理は二つある」(I 389) 同一律では肯定的と否定的の真理が成立する。ゆえに第三命題では「同一律の方が矛盾律よりも優位にある」(I 390) とする。

次に決定根拠律の後続的根拠では「認識根拠で満足する」(I 394) が、先行的根拠では「存在根拠」(I 392) が求められるので、この存在根拠の優位から「神の存在証明」が取り上げられる。

しかし「或るものが自らの現存在の根拠を自らのうちに持つということは不合理」（I 394）であるので「万物の可能性の絶対必然的な原理として唯一の神が存在する」（I 395）とし、これが「最も本質的な証明である」（ibid.）とする。しかしカントの形而上学が、自然の形而上学と道徳の形而上学を考えていない限り、独断的形而上学となる、といえよう。

### 3-2 『神の存在証明』1763年

カントは『天界自然史論』では、宇宙の生成「宇宙の体系的構造」（I 246）に「神は存在する」（I 228）ことを前提としていた。次いでカントは、1763年著作『神の存在証明』で、神は如何にして存在するかを証明するために、あらゆる種類の神の存在証明を分析的手法で明らかにしようとし、以下では神の存在の証明根拠そのものの考察が行なわれる。

まずカントは、可能なものからの存在証明を吟味する。その際、カントの命題は「現存在はなんらかのものの述語（predictum）または規定ではない」（II 72）というものである。つまり述語は「可能的なものとしてしか存在できない」（ibid.）ので「絶対的に必然的なものの存在を証明しようとする場合」（ibid.）、「現存在はそういった述語の中には決して見出されない」（ibid.）。従ってカントによれば、可能的なものから出発する現存在の証明は有りえないものとなる。この考察の証明根拠の吟味について、カントは「根拠としての単に可能なものの概念から帰結した現存在が推論される」（II 156）に過ぎない「有名な証明」（ibid.）を持っている、とする。それが「いわゆるデカルト的証明」（ibid.）である。

次にカントは「現存在を前提としている限りでの内的可能性」（II 78）を吟味する。その際、カントの命題は「いかなるものの内的可能性もなんらかの現存在を前提とする」（ibid.）というものである。その場合、カントによれば可能性の存在根拠は形式的根拠と実質的（recht）根拠が含まれている。ここから「なんらかの可能性が存在して、しかもなんらかの現実的なものが存在しないということは、自己矛盾」（ibid.）となる。従って「すべての可能性は...現実的なものの帰結という形で与えられる」（II 79）ものとなる。そこでカントは、内的可能性の「現実的なものをこの絶対的可能性の第一実在根拠」（ibid.）と名づける。この絶対的可能性の「第一実在根拠」こそが、カントのいう神の現存在に他ならない。それゆえ神の現存在は「絶対的な現実的必然性」（II 82）の証明根拠を有する。このカントの提唱が「神の存在論証の唯一可能な証明根拠」（II 63）となる。

以上においてカントは神の存在の証明根拠そのものの考察を「ア・プリオリ（a priori）な道によって絶対的に必然的な現存在から出発したが、今度はア・ポステリオリ（a posteriori）な道によって同じ絶対的に必然的な現存在へと上昇する」（II 92）。つまりカントは「自然科学（Naturwissenschaft）を通して神の認識へと上昇しようとする方法」（II 68）によって、神の物理神学（Physiktheologie）上の存在証明を吟味しようとする。

そこでカントは「神の現存在がア・ポステリオリに推論される」(II 93) ことに対して、まず「観察から一般的判断へと注意深く上昇する方法」(II 97) を取る。そして「神に対する万物の依存を道徳的依存と非道徳的依存に分割する」(II 100) 場合、いずれかに依るのではなく、自然の「一般的な法則に従って必然的に」(II 102) 帰されるものとなる。また「自然秩序の仲介によるか、よらない、神に対する万物の依存について」(II 103) も、カントは「それを自然法則に帰する」(II 104) とする。さらに「世界の完全性を自然秩序に従って判定することに対する我々の証明根拠の適用」(II 108) については「自然が必然的な法則に従って働いている場合、神の直接的な修正がそこに割り込んでくる余地は全くない」(II 110) ののである。なぜなら「物の本質的な関係は、自然秩序の必然性の諸根拠をなす」(ibid.) から「自由法則ですら、それ自体として一般的な自然秩序の規則から独立ではない」(II 111) ののである。

また「物理神学の通常の方法の不十分性」(II 116) が三種類示され、それぞれ批判が加えられる。第一の「方法は、自然秩序を中断させる力の確認に基づく場合」(ibid.) である。この方法は「自然のあらゆる完全性、調和、美を偶然的なものとする」(II 118) ことによって、と批判する。第二の「方法は、自然の偶然的秩序から創造者である神に到達する場合」(II 116) である。この方法は「十分に哲学的でなく」(II 119) しかも「自然研究に限界が設けられる」(ibid.) と批判する。第三の「方法は自然の規則性における必然性から現存在の最高原理であるだけでなく、一切の可能性の最高原理でもある神に達する場合」(II 116) である。この方法は「世界のあらゆる組み合わせと技巧的な結合の創造者を証明するには有用であるが、質量そのものや宇宙の構成要素そのものの起源の創造者を証明するには、全然役立たない」(II 122) と批判する。

以上のようにカントは、通常物理神学に対する懐疑的吟味を行った後、終りに「神の現存在のあらゆる可能な証明根拠」(II 156) を二種類に分け、吟味する。それは第一種「神の存在の証明根拠は、純粋に可能なままのあるものという知性 (Verstand) 概念から導かれるのか」(ibid.)、第二種「神は、それとも実在するものという経験概念から導かれるのか」(ibid.) のいずれかである。

まず第一種は「根拠としての可能なるものから帰結としての神の現存在が推論される」(ibid.) というものである。これは、先に見た「いわゆるデカルト的証明」(II 156, 162) である。カントによれば「人は、まず一切のあらゆる完全性を含む可能なるもの概念を思い浮かべる。次に人は、現存在もまた事物の一つの完全性であると考え。このようにして人は、完全なるもの可能性から、そのもの実在 (real) を推論する。...しかしそのようなことは、実際上ありえない」(II 156) のである。カントはさらに「現存在は述語ではない。従ってまた完全性の述語ではない。それゆえにさまざまな述語の勝手な結合からなる可能性なもの定義から、そのもの実在を推論することはできないし、なおさら神の現存在の推論もできない」(II 156-157) とする。

ここにおいてカントは、デカルトによる神の存在証明に対する批判を行っているのである。

第二は「経験的なものから独立の第一原因を推論し、さらに第一原因の概念の分析を経て間接的に神の属性を推論するか、あるいは経験的なものからただちに神の現存在および諸属性を直接に推論する」（II 156）という「ヴォルフ（Chr. Wolff）学派の哲学者」（II 157）の証明についてである。しかしこの証明も「やはり全く不可能」（ibid.）である。なぜなら「現に存在するものについての因果律に従って独立の第一原因に到達し、そしてこの第一原因から、この経験概念の論理的分析を通して、神の属性に至るという証明」（ibid.）の仕方は、結局「経験概念に基づかず、概念から行われている点で、デカルト的証明と同様」（II 158）だからである。ここから人は、概念からの証明により、独断的に「存在を属性の同一あるいは矛盾の中で発見できるというまじがった考えの上に立つ」（ibid.）ものとなるのである。

カントは『神の存在証明』の序文で「この著作は未完成の形をなしている」（II 66）としているのも、現代のような時代では「形而上学といった学問に関しては、一切のものを説明し、証明しよう」（ibid.）とはせず「見取り図の輪郭を画く」（ibid.）として、暗示的にまだ形而上学の入口にあるとして「仕上げの不完全さを印象づける」（ibid.）のである。結局のところ、カント哲学の核心は、神の現存在は「絶対的な現実的必然性」の証明根拠を有するものとするが、自然の形而上学はなく、道徳の形而上学を顧慮しない点で、独断的形而上学である、という精神的解釈に留まる。

### 3-3 『判明性研究』1764年

数学的方法と形而上学的方法を区別する『判明性研究』で、カントは形而上学の「認識における可能なかぎりの確実性(Gewissheit)」（II 275）の方法は「ニュートンの方法」（ibid.）と同様に「確実な経験的命題とそこから引き出された直接的帰結に限定」（ibid.）しようとする。ここではカントは、全体として数学的認識の確実性を基準にして哲学的認識の確実性を考慮している。そして「形而上学において、できる限りの確実性に到達すべき方法」（II 283）では「形而上学の真の方法は、ニュートンが自然科学に導入し、そこで極めた効果を示した方法と同一である」（II 286）と結論づける。

次にカントは「自然的神学と道徳の第一根拠が持ちうる判明性と確実性」（II 296）では「自然的神学の第一根拠は最大の哲学的明証性を持ちうる」（ibid.）として「神についての形而上学的認識は極めて確実」（II 297）とする。これに対して「道徳の第一根拠は現段階では未だ必要なすべての明証性を持ちえない」（II 298）とし、これを証明可能なものとするためには「拘束性」（II 300）が規定されなければならない、とする。カントに自然の形而上学はないが、ここでは道徳の第一根拠についての合理的形而上学という精神的解釈が可能となる。



### Ⅲ 前批判期の経験的、懐疑的形而上学期

#### 1 序

カントがイギリス経験哲学や道徳感情論を取り上げ「美と崇高の感情」に現れる様々な諸相を美学的、人間学的に分析する著作が『美と崇高の感情の観察』1764年<sup>12)</sup>である。さらにカントが文明化した人間社会を批判するルソー (J.-J. Rousseau) の思想を取り上げるが、ルソーに反して文明化した社会を人間、自然、自由および意志の完全性により啓蒙し、新しい道徳的原理を志向する著作が『美と崇高の感情の覚書』1764-1765年<sup>13)</sup>である。そして『講義公告』1765年<sup>14)</sup>では、カントが重視する人間の「自由の単純さ」(XX6)に基づき、大学講義も「自然の順序」(II 305)に従って「指導上の規則」に依拠すべき、とする。また『美と崇高の感情の覚書』で「形而上学は人間理性の限界の学」(XX181)とするのに反して、スウェーデンボリ (E. Swedenborg) が人間理性の限界を越えて「形而上学の夢」を語ることに對するカントの批判が『視靈者の夢』1766年<sup>15)</sup>である。

#### 2 『美と崇高の感情の観察』1764年

カントは「美と崇高の感情」について、1対象としての自然区分、2人間一般における特性、3両性の相互関係の区別、4国民的性格を考察している。まず1「対象としての自然の区分」(II 207ff)では崇高の表現として「喜びを引き起こすが、恐怖を伴う」(II 208)印象をえるため人は「崇高の感情を持たなければならない」(ibid.)。美については「花の咲き誇る牧草地」(ibid.)は「快適な感覚を引き起こすが、これらは朗らかで笑いかける」(ibid.)とする。そして「崇高なものは感動させ、美しいものは興奮させる」(II 209)という崇高と美の区分が、次に2「人間一般」(II 211ff)の徳の諸相の区分に適用される。カントによれば「崇高な特性は尊敬(Hochachtung)を、美的な特性は愛をふきこむ」(II 211)。そして「真の徳(wahre Tugend)のみが崇高であり」(II 215)、「愛すべくまた美的」(ibid.)な徳は「高貴」(ibid.)とみなされる。

さらに3「両性の相互関係」(II 228ff)の徳の諸相の相違では、カントによれば「女性の徳は美しい徳である。男性の徳は高貴な徳であるべきである」(II 231)。この相違の分析の事態は「人間性の全体」の徳が「偉大な自然の計画に属する限り」(II 227)においてのみである、とする。4「国民的性格」(II 243ff)の区別では「美の感情においてはイギリス人とフランス人が、崇高の感情ではドイツ人、イギリス人、スペイン人が最も優れている」(II 243)。確かにカントは美と崇高について道徳感情論、イギリス経験論に学ぶが、道徳的感情に機は熟さず「道徳の形而上学」に至らずして経験的形而上学に留まるものとなる。

### 3 『美と崇高の感情の覚書』1764-1765年

カントはルソーの『エミール』1762年<sup>16)</sup>を読み「神はニュートンとルソーにより義とされる」(XX59) とするように、ルソーをニュートンと並べて高く評価する。カントはルソーへの傾倒により知識や認識の学から人間の学の優越へ変化する。ルソーを通してカントは「人間を尊敬することを学ぶ」(XX44) のだが、その人間を「ルソーは総合的に取り扱い、自然の人間から出発する」(XX14) のに対し、カントは人間を「分析的に取り扱い、文明化した人間 (gesittete Menschen) から始める」(ibid.) とする。

つまりカントはルソーのいう自然の人間の概念を継承しつつも「自然は決して人間を市民に創造するものではない」(XX31) ので、文明化した人間社会を認識し、分析するためには、自然の人間の自発性や自由な人間の視点に注目する。カントがルソーから学んだ根本は人間の「自由」という道徳的原則である。つまりカントは「美と尊厳の感情」(II 217) から「自由の状態」(XX56) を規定する「意志の完全性の感情」(XX137) を道徳的感情とする。しかしカントは『美と崇高の感情の覚書』で「人間」に学び「自由の状態」を志向するも、自然の形而上学ではなく、道徳的原則を志向するが、道徳的法則に至る道徳の形而上学ではなく、経験的形而上学に留まるものといえよう。

### 4 『講義公告』1765年

カントが知識や認識の学から人間の学への優越性としての「変化」を示す新しい思考は哲学という講義方法に見出される著作『講義公告』に見られる。そこでは「青年のすべての指導」(II 305) には「自然の順序に従えば」(ibid.) 知性の成熟の後に理性による認識をえるものである。つまり「知性は活動的で市民的な生活に役立つ」(II 311) 能力であり、理性は「観想的な生活に役立つ」(ibid.) 能力である。にもかかわらず従来の教授法が、知性からでなく理性から始める。これに対し、カントのいう新しい教授法は「指導上の規則」(II 306) により「まず第一に知性を成熟させ」(ibid.) 次に「知性を経験についての判断により訓練させること」(ibid.) である。ただしこの「指導上の規則」(ibid.) は哲学についてであり、他の学「歴史的学と数学的学」(ibid.) は学ぶことのできる部門である。つまり「哲学には特有の性質があり」(ibid.) それは「探究的、即ち研究的」(II 307) である。

さて哲学部門の形而上学についてカントは、バウムガルテン (A. G. Baumgarten) のように「抽象的なもの」から「具体的なもの」へとは逆に「具体的なもの」としての「人間についての形而上学的経験学」(II 309) から始め「世界の学」(ibid.) へ進む、とする。このようにカントは形而上学の教授法は「難しい学である存在論」(II 310) からでなく「人間についての形而上学的経験学」(II 309) から始めるとして、ここに『講義公告』は経験的形而上学を志向するものとなる。

## 5 『視霊者の夢』1766年

カントによれば「形而上学は人間理性の限界の学である」(XX181)のに反して「形而上学の夢」を語るスウェーデンボリの著作『天界の秘儀』1749-56年<sup>17)</sup>を批判した著作が『視霊者の夢』である。カントによれば「あの世は夢想家たちの天国」(II 317)なので「いくつかの物語の真偽をしっかりと調査した」(II 318)と告白する。その結果、近代哲学者たちは「霊とは理性を有する存在者である」(II 319)とし「この種の単純な存在者は非物質的存在者(immaterielles Wesen)と呼ばれる」(II 321)とする。このことからカントは「非物質的存在者の可能性を仮定するができる」(II 323)とするが「この可能性を理性的根拠によって証明することを望まない」(ibid.)とする。しかしこのことから他方でカントは「世界における非物質的本性の存在を主張し、私の魂そのものをこれらの存在者の部類に入れることに大いに傾いている」(II 327)と告白する。つまりカントは、物の世界とは区別された別の世界〔可想界〕を仮定するのである。

カントは霊界(Geisterreich)との交互作用の問題意識を明確にするため二つの世界の関係認識から始める。カントは「人間の魂はこの世において同時に二つの世界と結びついている」(II 332)とする。つまり「魂は身体と結びついた人格的統一体となっている間は物質的世界(materielle Welt)のみを明瞭に感覚する」(II 332)が、一方霊界では「魂が常に霊的本性との間に結んでいる相互作用が残存」(ibid.)する。カントは「非物質的世界」としての「霊界においては」、「霊的完全性」(II 335)は「霊的法則に従う」(II 336)とする。しかし「霊界の表象」は「経験的概念ではない」(II 338)が「霊界側からの影響」は「諸概念の連合された法則に従って」(ibid.)理性の限界を越え、比喩による「類比的(analogisch)表象」は、我々の「意識に入り込むことができる」(II 338-339)とするのである。そしてカントは「もう一つの世界の直観的認識がこの世でえられる」(II 341)とする。つまりカントによれば「霊の物語の一つ一つはことごとく疑うが、全てを総括したものにはいくらかの信を置くという奇妙であるが通常の留保条件をもって、さまざまの霊の物語に対して全く一切の真理を拒否しない」(II 351)とし、いわば「秤」(II 349)の比喩を用いて霊の二義性を示そうとする。換言すればカントは、夢想家の見る「形而上学の夢」が人間認識の限界を越える霊界に可想界を想定しようとするという意味づけで、懐疑的形而上学を承認している、と精神的に解釈されるのである。

## IV 前批判期の批判的形而上学期

### 1 序

『視霊者の夢』では非物質的世界と物質的世界を区別する形式的原理は未だ見出されていない。そこで可感界での形式的原理の明証性の確立は『可感界と可想界』1770年で、可想界での形式的

原理は書簡集「沈黙の10年」1771-1781年で明示される。本節では、その諸問題の精神的解釈を行うものとする。

## 2 『可感界と可想界』1770年

カントは『視霊者の夢』において非物質的世界の「魂という実体は空間が占めている」（II 323）つまり空間は客観であるとして可想界に空間の存在を認識している。また『空間方位論文』1768年<sup>18)</sup>でニュートンの「絶対的空間」（absoluter Raum）を承認し、絶対的空間は「それ自信の実在性を有する」（II 378）としていたが、絶対的空間によって可想界説明の明証性はえられないと考えるようになった。そこで『可感界と可想界』ではカントは空間概念自体を主観的空間概念に変更するものとなる。この主観的という感性的認識の形式的原理の発見が「69年が私に大いなる光を与えた」（X VIII 69, R. 5038）とする。つまり時空という感性的認識は可想界認識に関与しえない座標軸という新たな「光」を意味する。可感界と可想界の二世界観に基づき、カントは「精神（mens）の本性からその〔世界〕概念の二重性」（II 387）を顧慮することにより可感界は直観による時空の形式から構成される現象界であり、可想界は「単純なもの」という「原因〔神〕」（II 398）から統制される抽象界を意味するものとなる。そこで形式的原理としての「感性（sensualitas）とは主観の受容性であり」（II 392）一方「知性（理性）（intelligentia（rationalitas））とは主観の能力である」（ibid.）。つまり「感性的認識は現象する通りの物の表象であり、それに対して知性的認識は存在する通りの物の表象である」（ibid.）という二元論となる。

しかし「感性的認識と知性的認識との区別を説く学説は、形而上学への予備学」（II 395）に過ぎず、ここでは可感界と可想界を区別する形式的原理を示す批判的形而上学が問題である。また可感界と可想界を区別する形式的原理としての直観について「知性的直観は（人間にとっては）存在せず、象徴的認識でしかなく」（II 396）、「客観的原理」（II 398）を意味する。一方「人間的直観の形式的原理（空間と時間）」（II 396）は「人間の感官の対象たりうる条件であるので、感性的認識の条件である以上、知性的認識の手段ではない」（ibid.）のであり「主観的原理だけを認める」（ibid.）のである。かくしてカントは、可感界を説明する形式的原理である主観的原理としての感性的概念の明証性を確立するのである。

## 3 書簡集「沈黙の10年」1771-1781年

1771年6月7日付ヘルツ（M. Herz）宛の書簡<sup>19)</sup>で、メンデルスゾーン（M. Mendelssohn）が「時間が単に主観的なものとするに承服できない」（X115）としていたことに対し、カントは「感性（Sinnlichkeit）だけでなく悟性（Verstand）という人間の精神能力（Seelekräft）も主観的原理（subjectivische Prinzipien）に基づくものであって、直接対象に関係するものから

区別する」(X122)とする。つまりカントは可感界での形式的原理である感性と悟性を主観的原理に基づかせることにより、可想界という対象から区別し、可想界の形式的原理として理性という認識能力を新たに承認しようとするのである。そこでカントの「やり方」は他の人々が「形而上学的研究において」見過ごして来たもの、そして「形而上学のすべての秘密を解く鍵となるもの」(X130)は「形而上学が教えるア・プリアリな認識」(XVIII 564, R. 4473)のための感性、悟性および理性の問題である。感性については「表象が単に主観的にどのように対象から触発されるのかという仕方」(X130)は、表象が対象に対して受動的、感性的ということである。悟性は表象による対象の原理でもなく、対象が表象の原因でもなく「客体によって引き起こされたりするものでもなく」(ibid.)、「魂 (Seele) の本性の中へ、その起源をもたなければならない」(ibid.) ものなのである。理性については「対象すらも表象によって産出される」(ibid.) その関係の仕方は「表象が客体〔対象〕に関して能動的である」(ibid.) こと、それは「神の認識」を指している。

このようにしてカントは「理性の仕方を確実にしかも適用の容易な規則の下にもたらされうるような教説を自分が所有し」(X144) 成功している、とする。この教説こそ『純粹理性批判』である。かくして「私の超越論的 (transzendental) 哲学が完成されるなら、それは純粹理性の批判である」(X145) とする。その後カントは二つの形而上学「自然の形而上学と道徳の形而上学 (Metaphysik der Natur und Metaphysik der Sitten)」(ibid.) に取り掛かる。そしてこの仕事の完成のためにカントは「純粹理性の領域が概観されうることでなければならない」(X199) とする。このようにしてカントは可想界での理性認識の形式的原理を確立し、道徳の形而上学という批判的形而上学期を完成させる、と精神的解釈をするものである。

(未完)

註：カント著作からの引用は、アカデミー版カント全集に基づき、巻数をローマ数字、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に ( ) で示す。なお『純粹理性批判』に関しては、慣例に従い、第一版をA、第二版をBとし、ページ数をアラビア数字で示す。

注)

- 1) Kant, Immanuel :*Öffentliche Erklärungen*, 1790-1801. in : Kant's gesammelte Schriften. Hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften (abgek. KGS.). Bd. VIII. 1912.
- 2) Cassirer, Ernst : *Philosophie der Aufklärung*, Verlag von J. C. B. Mohr, Tübingen 1932. Vorrede XV.
- 3) 精神的解釈とは、人間の精神活動を歴史の面から理解する方法のことを意味する。この精神的解釈に関連づけて、ディルタイ (W. Dilthey) はアカデミー版カント全集の第一巻に序文 (1902年7月付) を寄稿して「偉大な思想家の歴史〔的解釈〕は、彼等の体系を照し出し、人間精神史の理解にとって不可欠の基礎である」(Bd. I. VIII) とする。つまり精神的解釈は「過去にはまだ呈示されえなかったものの創造であり、新しい価値の明示」(Dilthey, Wilhelm : *Gesammelte Schriften*, Bd. V. 1924. S. 218.) の体系を含意するものである。換言すると、ディルタイによれば、歴史的世界観、歴史的理性批判は「人間精神を解放する」(Dilthey, W. : Bd.V. S. 9.) ものである。

- 4) Jaspers, Karl: *Einführung in die Philosophie*, Artemis-Verlag, Zürich 1949. S. 40.
- 5) Kant, I.: *Kritik der reinen Vernunft*, 1 Aufl. 1781. 2 Aufl. 1787. in: KGS. Bd. III. 1911.
- 6) Kant, I.: *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels*, 1755. in: KGS. Bd. I. Berlin 1910.
- 7) Kant, I.: *Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio*, 1755. in: KGS. Bd. I. Berlin 1910.
- 8) Kant, I.: *Der einzig mögliche Beweisgrund zu einer Demonstration des Daseins Gottes*, 1763. in: KGS. Bd. II. Berlin 1905/1912.
- 9) Kant, I.: *Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral*, 1764. in: KGS. Bd. II. Berlin und Leipzig 1912.
- 10) Kant, I.: *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis*, 1770. in: KGS. Bd. II. Berlin und Leipzig 1912. S. 385-419. 参考英文訳として、ウォルフォード (D. Walford, 1992.) を参照した。The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant. In: *Theoretical philosophy, 1755-1770*. translated and edited by David Walford, Ralf Meerbote, Cambridge University Press 1992, *On the form and principles of the sensible and the intelligible world* [inaugural dissertation] 1770. pp. 373-416.
- 11) Kant, I.: *Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte*, 1747. in: KGS. Bd. I. Berlin 1910. S. 1-181.
- 12) Kant, I.: *Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen*, 1764. in: KGS. Bd. II. Berlin 1912.
- 13) Kant, I.: *Bemerkungen zu den Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen*, 1764-1765. in: KGS. Bd. XX. Berlin 1942.
- 14) Kant, I.: *Nachricht von der Einrichtung seiner Vorlesungen in dem Winterhalbjahre von 1765-1766*, 1765. in: KGS. Bd. II. Berlin 1912.
- 15) Kant, I.: *Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik*, 1766. in: KGS. Bd. II. Berlin 1912.
- 16) Rousseau, Jean-Jacques: *Émile ou de l'éducation*, 1762. *Émile* / by Jean-Jacques Rousseau; translated by Barbara Foxley. J. M. Dent & Sons, London, 1961. (Everymann's library; essays & belles-letters; no. 518).
- 17) Swedenborg, Emanuel: *Arcana coelestia* (1749-56) : the heavenly Arcana contained in the holy scripture or word of the Lord unfolded beginning with the book of Genesis: together with wonderful things seen in the world of spirits and in the heaven of angels/ by Emanuel Swedenborg. London: Swedenborg Society, v.1-v.12. — Swedenborg Society, 1922—(1980).
- 18) Kant, I.: *Von dem ersten Gründe des Unterschiedes der Gegenden im Räume*, 1768. in: KGS. Bd. II. Berlin 1912.
- 19) Kant, I.: 67 [62]. Zu Marcus Herz. 7. Juni 1771. *Kant's Briefwechsel*. in: KGS. Bd. X. Berlin und Leipzig 1922. S. 121-124.

(著者は、名古屋市立大学名誉教授・博士(文学))